

高5期HP 熊田亮順さんを悼む

清水健二

高津5期生の友人だった熊田亮順さんの訃報を、昨年11月に彼の奥さんからのハガキで知った。9月に86歳で永眠し、年賀を遠慮させていただくという断りの文面であった。新型コロナウイルス感染拡大で内々葬儀を終えたという。この時期、世の中は入院しても患者との面会はできず、人の集まる葬儀は自粛し、多くは家族葬で終わってしまう流れになってしまっていて、彼の入院見舞いもできず旅立ちも知らず残念だった。

近年彼とは会うことはなかったが、年賀状は必ずくれていた。「リュウマチで辛い」とか「もうあかん！」とか弱気の走り書きがあって、何時もの半分冗談だと思っていた。一昨年「とりあえず息だけはしております」と書いた言葉が最後の便りになると思

いもよらなかった。字に震えもなく、若い時と変わらない彼特有の字体で書かれていた。



2020年最後になった年賀状



京都にて(1955年)右 熊田さん

熊田さんとの出会いは、浪人時代に高津高校の現役の先生方が、受験のための補習授業を階段教室でやってくれていた。たまたま彼と隣合わせになり、物理の大和久先生の講義中に、誰かが面白い事を口走って2人が吹き出して笑った瞬間、先生からチョークが飛んできた。それが縁で彼と付き合うようになった。

彼は阪大文学部に合格し、後に東洋史を専攻して博士号まで取得した。モンゴル語も勉強し旅をしたようで

ある。私は理系だったが彼とは何となくフィーリングが合ったようである。いつも話は面白く、大学時代によく京都の古刹を訪ね、あの寺には素晴らしい絵があるとか仏像があるとか国宝級の作品を教えてくれた。建仁寺の龍の天井画や風神・雷神の襖絵を観たり、南禅寺の大門から、歌舞伎の「楼門五三の桐」で石川五右衛門の「絶景かな、絶景かな！」と眺めた桜の話や、境内のローマ風で



京都建仁寺 龍の天井画

アーチ橋のれんが造りを見、琵琶湖疏水路として築造された水路閣に感嘆したものである。東山にある三十三間堂の千体の千手観音像は圧巻であったし、それを守護する風神・雷神の彫刻に見とれたものである。彼は風神・雷神は自然の厄災の守り神でもあるのだと説明してくれた。



雷神・風神の彫刻(2022年制作)



京都三十三間堂内千体観音像と風神像

2人で現在のJR紀勢線を鈍行の汽車で南紀を一周して伊勢に入ったが、その頃は途中全線開通してなかったので、新宮から尾鷲までバスで峠を越え乗り継いだものである。夜には駅前旅館を探し宿賃を値切って泊まった事もあった。またある時は京都から山陰本線で城崎を經由し鳥取砂丘へ。この時は汽車の煙で顔を煤だらけにして行ったものである。

彼の父親は寺の住職だったこともあり、大学を卒業すると福井県の名刹・永平寺に修業に出た。この寺は禅の道場として厳しい修業で有名だが、彼が修業を終えて帰ってから会った時は、「辛か

ったな。寒い朝でも素足で拭き掃除させられたり、座禅を長時間組まされたりと、軟な体では堪えたな」。と愚痴っていたが、彼は高僧を目指して頑張っている姿が見て取れ、密かに応援していたものだった。ところが30歳にならない前に父親が亡くなり寺を継ぐことになった。浄土宗西禅林寺派 梅翁寺の住職に就いたのである。

私が会社務めをしてからも、時々休みの日にひょっこり八尾市の拙宅に顔を出してくれ「元気か？」と訪ねてくれた。八尾市に数軒檀家があつて、大阪市内の西九条にある彼の寺から、お参りに来ての帰りに立ち寄ってくれていたのである。よく一杯やろうと飲むことがあつたが、彼はグラス一杯のビールで顔が赤くなるほどだったから下戸といえた。それでも日頃は寡黙な彼はよく喋って、彼の仏教芸術の話に私は耳を傾けたものだった。

彼は父親の影響で、幼少から仏教文化に親しみ育った事もあつて、文化・芸術に関する知識が豊富で、その後の私の人生に深く浸透したように思っている。彼はまた囲碁や将棋はプロ級に近く、暇さえあれば会所に通って勝負を楽しんでいた。全く信じられないのはアルゼンチンタンゴが好きで、立派なオーディオ装置を備えていた。私にTEACのテープデッキを勧め、一緒に日本橋の電気屋街に出かけて買った事があつた。私の方はもっぱらクラシックを楽しんでいたものである。

「琴棋書画」を好む風流人の如く、琴ならず洋楽を好み、囲碁、将棋、書や日本画から古陶磁器などを嗜み、浮世離れの生き方に私など企業に務めている身には、弱肉強食の激しい競争社会で何時も仕事に追い回されていただけに、異国の話のように思えた。しかし何故か羨ましいと思うことなく彼の話に興味を抱き聞き入ったものである。

彼が還暦を迎える頃に、早くも息子さんに住職を引き継いだ話を聞いて、私も退職したら彼から受けた美術や芸術の世界を覗いてみたいと思っていた。幸い彫刻を楽しんでいたこともあつて、第2の人生はアーティストといわれる方々との交流ができるようになり、少しはこの世界に触れることができたと思っている。しかし囲碁、将棋など勝った負けたの世界には全く入り込む気持ちにはならなかった。

彼が住職として、記念に正装した胸像を作つて歴代の住職の一人として寺に残してやろうと、話を持ちかけたら「気持ちは嬉しいが、勘弁してくれ」と拒否された。とにかく彼は写真を撮られるのさえ嫌っていて、この追悼文に写真を掲載しようと探しやつと1枚見つけたほどで残っていなかった。肖像などもってのほか嫌だったのかと思っているが、理由は聞かなかつたのが今も気になっている。そしてまた彼はあちこちで法話をしていたようだが、一度も講話をしているところを見たことも、

話の中身を聞いたこともなかった。「説法するのは嫌やったな」と照れていた。今になってもっと彼の宗教家としての本来の姿を知っておくべきだったと残念に思っている。

彼が亡くなって半年になった。彼の生きた道とは違っていたが、私の第2の人生は彼が私に語ってくれた数々の文化遺産に出会う度に彼のことを思い出し、仏教美術や彫刻・工芸の領域に触れることができ、ここまで長生きした事は彼の飄々とした生き方に学んだおかげだろうと感謝している。

今年7月初旬に、彼の寺がある西区九条に近い江之子島文化芸術創造センターで、私の所属する美術団体が開催予定している「絵画と彫刻展」がある。会員有志による小品展で、彼と鑑賞した印象深い風神・雷神の彫刻を私なりの作風で、彼を偲びながら制作した小品を先日完成した。像高約30cmで拙作ながら追悼の気持ちと供養のために出品するつもりでいる。

令和4年4月 記